

ヤーコ・セイックラ、トム・アーンキル 著、斎藤環 監訳

『開かれた対話と未来 今この瞬間に他者を思いやる』

医学書院、2019 年

345 頁、2,700 円（税別）

哲学対話については、対話の中身は様々であれ、対話の場を作り出すことに意義があるとしばしば言われる。しかし、「対話の場」がそれ以外の会話や議論の場と違うのなら、その作り方に特有の難しさもあるはずだ。例えば、「ケア的側面」と言われるものは捉えがたく、この側面の探究はなお手薄だと言わざるをえない。そうであれば、ケアにかかわる対話の場を作り出す別の実践から学ぶことは有意義かもしれない。フィンランドで生まれた「オープンダイアログ（開かれた対話）」（以下、OD と略記）はそうした実践の有力な候補である。

本書は、OD の理論的主導者ヤーコ・セイックラと、OD を実践型に改良した「未来語りダイアログ」の開発者トム・アーンキルによる共著である。フィンランドの National Institute for Health and Welfare(日本の厚生労働省に相当)の公式刊行物ということだ。急性期の統合失調症患者への治療的介入として開発された OD は、「患者を治してやろう」といった温情主義的な立場では提供できない「対話の場」に重点を置く実践である。日本でも「オープンダイアログ・ネットワーク・ジ

ャパン (ODNJP)」が発足しており、知名度が増しているところである。

そんななか登場した本書の特徴は、その OD の着想や成果を報告するだけでなく、著者たちが精神科病棟での実践のなかで気がついた「対話性」の価値を広め、精神医学の領域に限らず、あらゆる人間関係の心配事への対処に関して、その地位を高めることを目指している点だ。それゆえ、「対話は音楽だ」「対話における応答の意味」「対話実践の文化を広める」など、対話文化の未来に向けて幅広い考察がなされている。

ここでは OD の一般的説明や報告の部分は省いて、著者たちが提示する哲学的な基本思想だけを取り上げよう。

一つは、OD のいわば人間存在論である。著者たちは精神科病棟での対話実践で多職種間連携の重要性に気づいたと言う。対話実践においては、臨床心理士、社会福祉士、教員、保育士、家族、友人などがそれぞれの役割を果たすことになるが、従来、お役所的な縦割り組織や、医療専門家と非専門家の壁などのために、これらの人々の連携は重視されてこなかった。しかし、患者を全体的に捉えるには、この患者に関係する様々な人々のそれぞれの立場からの声が必要であり、その関係性が対人援助職の原点となる。患者の友人の声は、対話において、医者と同じように、時にはより重要な働きをする。著者たちによれば、これらの人々が参加する対話は、大規模な組織改革なしに「境界を越えるアート」としての価値をもっている。

こうした OD の思想において、患者は単一の個としての存在ではなく、(例えば、子どもがいて、同僚がいて、医者がいて、といった) 関係性の結

び目のような存在として捉えられている。ODは、患者自身を導くのではなく、患者を取り巻く他者との対話を導くものだが、その基盤として、人間を対話のなかに投げ込まれた関係的存在として把握する思想が発掘されている。人間はもともと人に話を聞いてもらうことを必要とする対話的存在であり、ODの成功事例はそういう意味で本来的な姿に人間が帰ることかもしれない、とまで踏み込んだ見解が述べられている。

第二に取り上げたいのは、対話性という人間関係の核心には「他者性」があるという思想である。他者性とは互いに平等でありながら異質な存在だということだ。関係的であるとは自己を損なうことではなく、一人として同じ関係性にはいないのだから、むしろ誰もが唯一的存在だということに他ならない。だから、患者の現象を知るために対話をする場合でも、関係性の網の目のなかでなされる対話は、患者が医療の客体ではなく、治療の主体（あるいは自分自身）になる方法である。医療者も、患者が唯一的存在であり、常に医療者の理解を超えた存在であることを認めなくてはならない。著者たちは、その他者性を尊重するために患者を無条件に受け止める必要があると言うが、それは大げさなことではない。他者性の尊重は、自分の話を聞いてくれるという態度にすでに示されている、と言う。それは、先の言い方を使えば、人間としての本来の姿に帰れる、ということだろう。

多声性や他者性の尊重と言えば、聞こえは良いが空虚なスローガンのように聞こえるかもしれない。しかし、本書はそれが現実にも可能であること、あるいは現実の実践から出てきた思想であることを示している。哲学対話におけるケア的側面への

示唆も少なくない。

たとえば、対話に参加する人間を、別々の個人の集まりではなく、関係的存在の集まりとして見る。ばらばらに集まった個人が関係を作るというより、すでに関係の網の目に巻き込まれた者たちが対話を通じてともに自分らしさを獲得するというイメージだ。例えば、親子が参加する哲学対話に、子どもの先生や地域の知り合いも参加するというイメージだろうか。

さらに、分かり合うのではなく絶対に把握できない相手として他者を見ること。これを原点にするなら、例えば親同士の哲学対話でも「あるある」の確認では真の対話ではないことがわかる。これらをスタート地点として開始される哲学対話はどんなものか。

最後に、本書の目玉の一つである「未来語りダイアログ」の哲学対話への応用を考えても面白いかもしれない。この対話は、うまくいった未来という想像上の視点から、現在からその未来までに誰と何をしたのかを対話することで、問題解決の手がかりを得るものだ。臨床場面を離れて、例えば「こういう世界に住みたい」という想像から、それが実現するまでに何が起きたのかを語り合うというのはどうか。絶対に正解のない問いをめぐる創造的な対話になるかもしれない。

様々なことが思いつくが、巻末の対話実践のガイドラインをつまみ食いしながらでも、「対話文化の実践」としての哲学対話へのヒントを引き出したくなる一冊である。

池田喬（明治大学）

稲原美苗（神戸大学）